

開学40周年を迎えて

大学の教員は今日たいてい、各自が所属する学会などの機関で研究発表する機会に欠かないと言える。それにもかかわらず、各大学は年々独自の「紀要」を編集して業績刊行してあまねく学問の奨励に努めている。そこには若手の研究者により多くの執筆チャンスを与えようとする配慮がそれとなく秘められているとはいえ、一巻としてまとめられた全体は当該機関の学問的関心と水準を示す責任を負うものであることは間違いあるまい。そしてまた、同じところに奉職する同僚の仕事についても充分わきまえていないのが、普通になってきているような現状では、互いの理解を深める貴重な一資料となるべき存在価値がある。とくに本短大のように専門の違いが実に多岐にわたりながら、ルーティンワークをとものにすることの多い部局では一層これがあるてはまらと思われる。もっとも例年は種々の条件のもとで、執筆者や論文のページの数に制限を加えざるをえないので、上記刊行の目論見が完全に果たされたきたとは言い難いのは事実である。しかるに今年度、本短大開学40周年を迎えてこの制限を解いて原稿を募ったところ幸い期待にこたえて19編が集まった。これは本短大における紀要編纂史上画期的なことである。各編の評価は執筆者各位の判断に止まることなく、公正な専門的見地からなすべきは当然であるにせよ、本巻を手にする人々はヴァリエティに富む内容を瞥見し、執筆者の探求意欲を感知するにやぶさかでないと思ふ。ちなみに本学40周年記念事業が50年の区切りを志向し新世紀への展望を持つことを充分な意味があるというのが、職員の共通認識だとすれば、今年度の紀要もその一礎石を現実に置く役を担ったものと言えるのではあるまいか。

1992年 3 月

学 長 塩谷 饒